

# くにたち しらべ



NO. 12

発行日 2012 年 7 月 24 日  
編集＝くにたち図書館地域資料ボランティア  
発行＝くにたち中央図書館

テーマ

## 『くにたちの地名』シリーズ 2 国立・谷保・青柳・石田・矢川

### 1 国立

(くにたちの名)

国立(くにたち)の語源は「国分寺」と「立川」の中間にあるため、その頭文字を一字ずつ取ったといわれます。大正15(1926)年に、開設した、中央線「国立駅」で初めて使用されました。旧国立駅舎と駅前広場を提供した箱根土地株式会社の堤康次郎社長は、「この地を中心にして新しき国が立つ。」という壮大な意も含めたと、後日回想しています。

自治体名称として「谷保」を「国立」と正式に名称を改めたのは、昭和26(1951)年4月1日です。

国立町という名称に変えるまでは、大字<sup>おおあざ</sup>#3むらとして扱われました。公簿<sup>#29</sup>上には、「国立」という名称はなく、谷保、青柳の一部とされ、正式に大字国立が認定されたのは、昭和18(1943)年です。(\*1・P206)

(国立地域の区分)

国立と改めるまで、現在の国立地域(東・中・西・北)一帯は谷保村大字<sup>はいじまみちきた</sup>谷保の「<sup>は</sup>拜島道北」、谷保村大字<sup>しも</sup>青柳の「<sup>こあざ</sup>武蔵野」、「<sup>こあざ</sup>下はけ」などの小字<sup>#4</sup>からなり、本村あるいは本町(谷保地区)側からは、“やま”(平地林)と呼ばれていました。

ではどうして“やま”と呼ばれていたのでしょうか。学園都市として区画整理されるまでは、武蔵野特有のナラやクヌギなどの雑木林に赤松の大木が混じり、そこから採れる材木、薪、粗朶(そだ)は農家の生活の必需品でした。落ち葉は貴重な堆肥の供給源、密生した茅は草屋根の材料となりました。(\*40-5,\*1・P160)

## 2 谷保村

国立市域には江戸時代、行政村落として上谷保・下谷保・青柳・石田の4カ村があり、明治9（1876）年には、342戸がこの地域にあり、十のむら（青柳、石田、四軒在家、久保、中平、石神、千丑、坂下、下谷保、下組）で成立していました。村は、甲州街道をはさんだ東西3Kmほどの路村状（道路に沿って長く伸びた集落）の集落です。その家々の背後には畑が続き、南の多摩川近くの水田、それに北部に広がる平地林とが、かつての村域です。



安政3年武蔵全図一部

図 2-1 江戸時代の村一部

明治22（1889）年の町村制<sup>#1</sup>施行に際し合併して谷保村となり、現在の国立市として引きつがれてきました。こうした行政村落とは別に、谷保地区（上谷保・下谷保）には近世以来、図 2-1 のように八つの村組がありました。

さらに多摩川堤防に沿った河原地区があり、これらのむら名は公簿上にはなく、昔から伝えられた俗称として呼ばれていました。（\*4・P7）

### （谷保の名）

谷保地名の起こりは明らかではありません。古代律令制のもとでは、地方や国・郡に分けられ、さらに郡の下に行政単位としての、里や保<sup>#20</sup>が設けられました。これは、今日でいう大字、小字に相当し、保<sup>#20</sup>は、今日の「字」に相当すると考えられています。

「谷」は「ヤッ」で、湿地帯の意味を持ちます。また一説には、立川入道宗成が立川に館を築き、この地をヤホ（野堡—とりでの意）と呼んだことから起こったとも言われています。南養寺の山門扁額には「谷堡」という字が刻まれています。谷の堡—武蔵野の谷の意味とも考えられます。

（\*4,\*6）

### （谷保の地名の初見）

弘安3（1280）年頃に、国の政務を担当する留守所<sup>#21</sup>の税所<sup>#22</sup>が、前年度の国衛<sup>#23</sup>の倉庫に納める5升米の員数を書き上げた記録『国庫納米員数注文』があります。その中に「谷保」の名前がでています。鎌倉時代には、市域の一部が武蔵国多摩郡（分倍庄栗原郷）谷保として、一つの単位所領となっていたことが伺われます。（\*2 中巻・P35,\*6）

(谷保の読み方)

“ヤボ”か“ヤホ”か“ヤブ”か。前述のように、南養寺扁額の谷堡、三田城趾の谷保<sup>あがたぬし</sup>県主は、堡→谷からヤホ、律令下の床御保の分類による谷の保(ムラ)でヤホ、さらに竹林の多い所としてヤブ(『新編武蔵風土記稿』)ともいわれ、判然としません。

しかし狂歌師の大田蜀山人(南<sup>なん</sup>畝)が、「神ならば出雲の国に行くべきに 目白で開帳 やぼのてんじん」と詠み、ここから「野暮天」の語を生じたとの逸話があるように、地元では、ヤボと言っていたようです。昭和32(1957)年の国土地理院発行の地図では、「やぼ駅」となっています。南武鉄道(現JR南武線)が、谷保駅名を語韻が、よくないということで濁音をとって「YAHO」としたことから“ヤホ”が広まったようです。谷保天満宮の前の道路標識も、“Yaho”となっています。

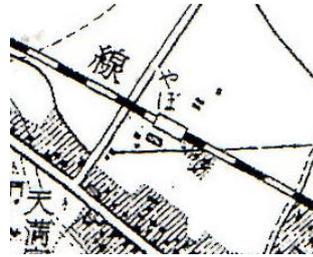


図 2-2 地図  
(昭和32年)

現在では、村が見つからないとき“やほ”、村が見ついたときは“やぼ”として、記載しているようです。ちなみに『江戸名所図会』では、“やふ”と記しています。また鎌倉時代の『知行書立』<sup>ちぎょうしょりつ</sup>に“やふ”と書かれています(日野市通史編 上巻・P298,\*42 『多摩のあゆみ』Vol. 137・P89の湯山学『戦国時代の高幡三郎』)。ちなみに谷保天満宮は、“やぼ”としています。



図 2-3 谷保天満宮前信号

(文献にでる谷保)

他にも谷保について書かれている文献があります。

#### ー 1 『太宰縁起』

「栗原にあり、谷保と」と『和名類聚抄』<sup>わみょうるいじゅしょう</sup>より引用して次のように記述されています。

「倭名類聚(和名類聚抄#31)ニハ、大婆多磨云太平記二分倍作分梅栗原今ハ僅ニ字トナレリ、村ヲ谷保ト云十八史略ニ云 唐ノ高祖始テ定均田祖庸調法曰 四隣ヲ為保コレニヨリテ保ノ谷ナルベシ」(\*4・P19)

#### ー 2 『物類称呼』<sup>ぶつるいしやうこ</sup>#31-1』

国立は一見平坦地のようにですが意外に起伏があるのは、古多摩川の浸食による河岸段丘地だからです。東西に走る三本の段丘崖(ハケ)の間にそれぞれ峽地を形成していて、ハケ下から清水が湧きだしています。最初に人が住みついたのもこのあたりといわれています。当時の住民が生活の場

である峽地—谷間を保安するという意味合いから、「谷保」も生まれたという説もあります。(\*5)

安永4（1775）年に編纂された『物類称呼』という古書には、谷のことを「ヤッ」といい、昔この地が、谷状をしていたことによりヤをまもる（保つ）ヤッホと称すと書かれています。

#### －3 『武蔵名勝図会』 #33-1

文政3（1820）年に発行された『新編武蔵名勝図会』多摩郡之部 巻三 府中領の中で 谷保村内にある栗原は菅原がなまって変化したと伝えられたのではと、以下のように書かれています。

「……。或書云(\*大田南畝：蜀山人の編纂した『歴史雑纂』のことか) の辺の土俗ヤブムラという。又云竹藪などをば、ヤボと唱う。みな場之違いたるなり、又分倍河原へ近き地にあれど栗原郷と号するは本宿村とここばかりの唱えにて、近村にては号せず。栗原の謂われは不知。然れども谷保村の内の字に栗原という地あり。恐らくは栗原は菅原の転語にして誤りを伝えしなるべし。」

#### －4 『谷保村誌』

明治13（1880）年に書かれた『谷保村誌』では、谷保の生い立ちと天和3（1683）年に谷保村が分村したことと、明治8（1875）年に合したことが次のように記載され天神坂を境にして西を上谷保村、東を下谷保村としました。(\*6)

「本村往古ヨリ多摩郡分倍河庄栗原郷ト称ス 年歴詳ナラズ 多摩郡谷保ト称シ後多東郡ニ属シ年歴詳ナラズ 谷保村と称ス慶長年間又多摩郡ニ属ス後 天和三（1683）年本村ヲ二分シタ二村トナル ……  
（中略）後 明治八年十一月 上谷保 下谷保ニ村を併セテ一村トナシ、谷保村ト称ス」

### 3 上谷保村

現在の国立市谷保、泉1～2丁目、富士見台1～4丁目、中1～3丁目、東1～4丁目、西1～3丁目、青柳3丁目の一部の地域が相当します。

多摩郡西部、東西に通る甲州街道中沿いにあり、西は青柳村、東は下谷保村、南は多摩川および四ッ谷村（現府中市）、北は中藤新田・榎戸新田（現国分寺市）に接していました。

古くは分倍庄栗原郷と呼ばれており、江戸時代から四軒在家、久保、中平、石神、千丑、坂下の村があり、中央やや北寄りに栗原の小字が残っています。

#### 4 下谷保村

現在の国立市谷保・富士見台1～2丁目、府中市西府町1～5丁目、西原町1～4丁目の一部にあたる地域です。シモ（下）は、上谷保のカミに対しています。天保3（1683）年、谷保村は天神坂を境にして東側を下谷保、西側を上谷保の二村に分かれました。

新田も開かれ、『新編武蔵風土記稿』に武蔵野新田の一つとしてみえる上谷保新田は下谷保新田をさし、戸倉新田（現国分寺市）と地続きであることから文化・文政（1804～1831）以前に同新田の持添<sup>#24-1</sup>となりました。  
(\*22・P1056)

明治8（1874）年に上谷保村と合併して谷保村となりました。字として梅林、御経塚、東之原があります。下谷保は、この谷保村が、西から青柳、石田、四軒在家、久保、石神、坂下、下谷保、下組に分けられた中の一つであり、上谷保の名は消滅しましたが、下谷保の名は残されました。谷保天満宮より東へ甲州街道をはさんで、隣町の府中の境まで続いていました。明治21（1887）年の市町村制の公布により、石田村飛地、青柳村が加わり、新しい一つの谷保村が成立しました。

#### 5 青柳

石田とならび、多摩川氾濫の結果生じた開発新田の代表的なむらです。西多摩三田村沢井（現青梅市）の住民が多摩川の流れの関係（当時唯一の材木運搬法であったイカダ流し）で現日野市の東端の石田新井集落のさらに東端、多摩川と浅川の合流点に住みつきましたが(\*40-5)、寛文11（1671）年四ッ谷村（今の関戸橋の上流あたり）から現在の場所に移ったといわれています。そのゆえか、青柳は沢井の姓が多いようです。

ほぼ同じくして、対岸の石田村（現日野市）からも移住者がいたため、それぞれ青柳村、石田村飛地として成立したものとみられます。

『新編武蔵風土記稿』<sup>#32</sup>によると「青柳島という所がありしが、寛文11（1671）年ここへ移りしより、その旧地いにしえ楊柳多かりし故その名も起こり、村名と言えり」と書かれており、現在の青柳の地に移る以前の様子がそのまま村名となったと伝えています。



図 5-1 多摩川の変遷と青柳 (\*42Vol28・P49)

一方『和名類聚抄』には、多摩郡の十郷が記され、このうちの小楊（おやぎ）は、乎也支（おやき）と読み、音が青柳に通じるとの見方もあります。（\*6）。

また青柳村の移転については、明治に入ってからまとめられた『青柳根元録』（『佐藤康胤家所蔵文書』）に、つぎのように、土地争いの結果、現在地に移ったと記されています。

「多摩川南岸の一ノ宮・関戸両村（現多摩市）地続きの鎌倉道、別名陣街道ともいわれる街道に面した地にありました。しかし慶長元（1596）年多摩川の大洪水で流路が変わり、本宿（府中市）に接続していた、青柳村が、青柳嶋と呼ばれる中州に位置するむらとなりました。万治2（1659）年に再び洪水にあい、四ッ谷村（現府中市）に借地して暮らした後、土地争いの結果、現在地に移った」

むらには、江戸時代の戯作者伊藤単朴の墓や、大正天皇の野立所（大演習などで天皇の野外の休息所）跡があります。

北部に多数の新田開発の武蔵野、拝島道北、谷川上、下のはけなどの字として飛地がありました。現在の北、西、中、富士見台四丁目地域の一部にあたります。甲州街道北部は、青柳1，2丁目となっています。甲州街道南部は、整理中で、旧大字、字がまだ残っています。

#### （立東地区）

元文元（1736）年には新田開発<sup>#15</sup>地の検地が行われました。青柳村の持添新田<sup>#24-1</sup>は北部にあり、東は谷保新田、北から西は芋久保新田（現立川市）に接していました。（\*4・P254）

古老の語り伝えによれば、四ッ谷村から移るさいに、立東地区（現北三丁目あたり）を開発し、そこに住むはずでしたが、丁度この頃現青柳地点を千人同心<sup>#38</sup>隊士の住居とする計画が八王子へ遷されたのを機に、現在の地（甲州街道沿い）に住みついたとされています。（\*40-5）

立東地区より国立西部へかけて青柳の字名が残され、立東地区をキャーホッと呼ばれていました。（\*40-5）

立東地区は立川の東部に位置するため、俗称として立東と呼ばれたようです。

## 6 石田

石田は、多摩川対岸南部の石田村・新井村・下田村・万願寺村（現日野市）の入会<sup>#14</sup>新田で石田新田といわれ、土方歳三は、日野石田が故郷です。

青柳村と石田村は飛地#19の地籍が図 6-1 のように入り組んでいて、それぞれ独立したといわれることが不思議に思われる程ですが、現在甲州街道の南側にある石田地番は、昔は北側にあったといわれており、現在も墓地だけは北側に残っています。



一応石田地番もまとめ、村として存在もしてい

図 6-1 青柳・石田飛地 一部 (\*2 下巻。付表 3 一部)

たのでしょう。青柳・石田の両村は明治 22 (1888) 年の町村併合で谷保村と合併しました。

矢川駅は、石田村飛地で小字は鶉久保です。

青柳・石田は谷保とは、むらの成り立ちが違うため、ここには青柳稻荷神社が今でもあり、大祭は 9 月 9 日に行われています。

多くの飛地が、ありましたが、地番整理され、現在の青柳 1 丁目、3 丁目、西、立川羽衣町などの新地名になりました。残っている石田の大字、小字の残存地区についても、いずれ、甲州街道南部側は、青柳 2 丁目に、矢川付近は、矢川 4 丁目に変更され、消滅する予定です。

## 7 矢川

読みは、“やがわ”ですが、漢字は、矢川と谷川の二つが使われています。

谷については、谷保の項でも書きましたが、谷が本来の字と思われま

す。立川側に残る資料では谷川とあり、国立の資料でも、川の名称は矢川ですが、小字として谷川上やがわうえが残っていました。「矢川」は立川崖線下の湧水を集めて流れる川ですが、湧き出し地点の小川では、「谷川」で、下流の谷保村ではいつしか「矢川」と書くようになったのではないかと思います。

(矢川の語源)

矢川とは、流れが急で矢のように走ることから谷川について、この名がつけられ、ひろまったのでしょう。江戸時代遠藤基晴が著した『谷保案内』の書の中で「古き池こそ諏訪の淵、三家に久保に橋場こそ、流れも早き矢川とや……」と詠まれています。

(谷川の語源)

隣接の立川市においては、現在の錦町 5 / 6 丁目あたりが、『立川沿革史』字立川地域について「江戸時代の子字名」のなかにつぎのように「谷川」と出てきます。「都立立川高校の東南の低い段丘崖下から湧きだして、現在は府

中用水に注ぐ細流を谷川（やがわ）とよんでいます。」

江戸時代に書かれた『公私日記』<sup>#29</sup>にも次のように「谷川」と記述されています。天保14（1843）年の閏9月12日「快晴田方地押領午前相済午後大和田下より谷川迄相済み」

国立市においても立川市と接するところに「谷川上」の小字もあり、江戸時代から谷川と呼ばれていたようです。

「や」は、村田了阿『狸言集覧』によると「江戸近在にて草繁茂してみずある所をやと云」と書かれており、谷川（やがわ）の「や」も、草が繁茂し水のある湿地で、そこから流れ出た小川を「やがわ」とよんだものでしょう。

（『立川の地名－立川編一』（\*29・P138））

明治13（1880）年の『谷保村誌』「溝梁」「橋」の解説においても、谷川、谷川橋と記されています。上流の立川段丘下が小さな谷状をなしていることからきたものでしょう。（\*6）

## 8 語句の説明・解説（\*数字は、引用文献を示す）

### #1 町村制【ちょうそんせい】

町や村の組織運営に関する地方制度。江戸時代に生活共同体として制度化されていた町や、村を、明治11(1978)年の郡区町村編制法により行政単位に位置づけ、同21年の町村制により整備した。町村を整理・統合し、町村会は府県・郡の強力な監督下に置かれた。（\*12）

### #3 大字（おおあざ）

市町村区域内の1区画を示す。いくつかの小字を含み、近世の村に相当する場合が多い。（\*13）

### #4 小字（こあざ）

大字を構成する区画。単に字という場合は小字をさす。

### #5 字（あざ）

土地の小名の名称。田畑・山林・野地などにつけられた。口頭では名所・小名・下げ名ともいわれたが、帳面・証文には字だけが使用された。（\*13） #14 入会【いりあい】 入合・入相とも。近世、一定の山林原野を一定の集団で共同利用する慣行。入会で利用する林野は入会山という。入会の確立は近世村落の成立と不可分の関係にあり、内山・林持山とよばれる村中入会、数か村ないし数十か村が共同利用する外山の村々入会がある。入会地の利用は木材・薪炭・刈藪・まぐさなどの採取をはじめ農民の生産・生活上広範囲に及び、村寄合ないし村相互の規定に基づいて行なわれたが、中期以降には耕地拡大・商業的農業の発達のために、入会林野が個別村・個別農民に分割されることもあり札山・割山とよばれた。なかには村中入会林野が消滅する場合もあった。近代になると官民有区分政策によって多くの入会地が官有地に編入され、全国各地で利用権をめぐる入会争議が発生した。なお、湖沼や海岸部での漁業においても同様の共同利用組織が存在した。（\*12）

#19 飛地【とびち】 飛入ともいう。同じ行政地画に属するが、新田開発で、本村から離れ、他に飛び離れて存在する土地。本村と地続きでない他村内へ入り組んだ耕地。（\*13）

#20 保【ほ】 中国で行われた隣保制の単位。一定戸数で組織され、連帯責任を負う。中国の制にならい、日本の律令制で定めた隣保組織。隣接する5戸で構成し、納税・防犯などの連帯責任を負う。五保。平安京の行政区画の一。4町を1保、4保を1坊とする。平安時代以後の国衙領における所領単位の称。荘・郷・名と並称。（\*11）

#21 留守所【るすどころ】平安後期から鎌倉期にかけて、国司の#遥任化にともない、諸国の国衙（こくが）に置かれた行政機関。（\*12）

#22 税所【さいしょ】平安時代の国衙の分課的行政機関である#所の一つ。済所とも。990(永祚2)柞原八幡宮文書が初見。国内における官物の賦課・免除・収納等に関わる事務を管轄し、前例の勘申、免除認定、未進結解（けちげ）作成などを行なった。職業務には国ごとの異同はあるが、総じて国衙における最も主要な所の一つで、12世紀以降には、いくつかの国で税所氏を称する有力在庁官人氏族が登場。（\*12）

#23 国衙【こくが】諸国の役所。（\*12）

#24 添地【そえち】ある地面に添え加える地面。江戸において役所に付属としている屋敷地をいう。添地から生じた地代金は当該役所の経費の一部に与えられた。某所付屋敷というのはこの類である。（\*13）

#24-1 持添新田【もちぞえしんでん】新開地で石高はあるが、村居の農民が不在の土地。（\*13）

#29 公簿【こうぼ】法令の規定に基づいて、官公署で作成・常置する帳簿。（\*11）

#30 番地【ばんち】町・村・字などの地域内を区分してつけた番号。「所ところ」（\*11）

#31 和名類聚抄【わみょうるいじゅしょう】和名を付した意味分類体の漢語辞書。和名抄・倭名類聚抄とも。源順（みなもとのしたごう）撰。（\*12）

#31-1 物類称呼【ぶつるいしょうこ】辞書。越谷（こしがや）吾山編。5巻。1775年（安永4）刊。天地・人倫・動物・生植・器用・衣食・言語の7部門に分け、日本全国の方言約4千語を蒐集し、古書を引いて考証。諸国方言物類称呼。（\*11）

#32 新編武蔵風土記稿【しんぺんむさしふどきこう】1830(天保1)大学頭林述斎(衡)によって幕府に上呈された武蔵国全郡の町村を対象にした地誌の浄書稿本。266巻。幕府が後期に行った地誌編纂事業の一つ。（\*12）

#33-1 武蔵名勝図会 八王子千人同心出身の植田孟縉<sup>うねだもうしん</sup>が書いた多摩郡12巻の武蔵野を挿絵入りで紹介した本。文永3(1820)年に完成した。

#38 八王子千人同心【はちおうじせんにんどうしん】徳川幕府が、武田氏や、後北条氏の遺臣、その他浪人を集め、八王子およびその周辺に土着させ、甲州口の備えとして成立したのがその始まりである。その組織は、総勢千名で、一組を百名とし、十組からなる。（\*42,馬場憲一、Vol23,P24）

### #39 公私日記

柴崎村の名主、鈴木平九郎によって書かれた日記。天保8（1837）年から安政5(1858)年までの20年間、日々の天候、名主としての公的な記録のほか、年中行事、農作物、物価の相場、村内の事件、社会情勢など多岐にわたって克明に記録されている。（立川市民俗歴史資料館・説明資料）

## 9 出典・参考資料（〔 〕内の図書記号は 国立市中央図書館、（ ）は中央公民館）

- 1) くにたちの歴史 編纂 国立市 平成7（1995）年 [10・B1]
- 2) 国立市史 上中下 編纂 国立市 昭和63（1988）年 [10・B1]
- 4) 国立風土記 原田重久 迷水亭書屋 昭和42（1967）年 [10・B1]
- 5) わが町国立 原田重久 迷水亭書屋 昭和50(1975)年 (K291)
- 11) 広辞苑第5版 三省堂 1998年 [R813]
- 12) 岩波日本史辞典 岩波書店 1999年 [R210]
- 13) 日本史用語大辞典、日本史用語辞典 柏書房 1979年 [R210]

20-3 国立の生活誌Ⅲ谷保の講中倉と講

- 昭和60年くにたちの暮らしを記録する会国立市教育委員会 [10/D1]
- 29) 立川の地名－立川編－ 保坂芳春 立川市教育委員会 昭和63(1988)年 [28C3]
- 40)-5 郷土史研究資料 第1集 地名等による郷土の史的考証 沢井義雄  
北多摩郡国立町教育委員会 (郷土文化館)
- 42) 多摩のあゆみ 多摩信用金庫  
多摩川洪水と青柳島の変遷 比留間一郎 Vol28 S57/8 [C3]